

〔研究ノート〕

消費社会におけるコミュニケーション行為について

～福祉社会における主体形成についての予備的考察～

築山 崇*

1. はじめに

筆者の目下の実践的関心は、「少年事件」「学級崩壊」等の事象の背景にある、最近の子ども・青年をめぐる問題状況の分析を深めるための新たな視点を定め、社会の質的变化の深層をとらえた教育指導のあり方を明らかにすることにある。子ども・青年の行動の特徴や変化の背景・要因として、現代社会における商品経済の進展（モノ・カネが支配する生活が、人間の感性をゆがめているという認識）や人間的関係の希薄化・ゆがみを指摘する声は、批判的社会理論に限らず、もはや一般化しているといっていよう¹⁾。また、生活の社会化・商品化という非常に大きな構造的変化によって生じている問題状況を、教育という枠の中の、“重点の移動”で乗り切れると見るのは、楽観的にすぎよう。本稿では、これまで、今日子ども・青年の変化について、筆者が精緻な分析と体系的・構造的な議論を組み立ててこれなかったという自戒の意味も込めて、方法論的な吟味を中心に、今日の社会状況を変革していく主体として現代の子ども・青年をとらえる議論を展開してみたい。

2. 生活の社会化・商品化の進展と子ども—1992年大阪「子ども調査」より—

物質的に豊かな経済社会の中で育まれている積極面

1992年に、筆者も含む教員・研究者からなるチームで、大阪で小・中学生および高校生、およそ8千人を対象に、生活実態・生活経験と友人・親子など対人関係についての調査を行った。²⁾ 調査は、「生活の社会化・商品化」を基本的な分析視点に、子ども・青年の生活構造の変化とそれに伴う意識の変化をとらえようとしたものである。そこでは、生活リズムの崩れと商品文化への包摂の相関が見られる一方、地域における親密な人間関係が社会の否定的影響の緩衝壁となっている、「出番を待ち仲間の出番に配慮する新しい性質」を今日子どもがもっているなどいくつかの特徴的結果が得られた³⁾。とくに、「出番を待ち仲間の出番に配慮する新しい性質」は、「現代の経済社会が生み出した量的に豊かな文化環境によってすべての子どもが表出したい自己をもつようになっていることを土台としたものである」とされ、「今日の子どもたちが21世紀における新しい質の民主主義社会を実現する可能性をもっている」という提起につながっている。この提起は、単に今日の子どもの肯定的側面だけをとらえて、楽天的な展望を語ったものではなく、「気づかい過剰」という消極面と表裏一体のものであるという認

*つきやまたかし（京都府立大学福祉社会学部助教授）

識にもとづいている⁴⁾。

この調査以後の子ども・学校をめぐる特徴的な状況は、子どもの権利の理念が生かされた、子どもが主体的に参加するいろいろな取り組みの進展が見られる一方、小学校の「学級崩壊」に見られるような、「新たな荒れ」とも呼ばれる問題事象の広がりも見られ、積極面と消極面が交雑するものであった。筆者もこの数年間、「幼さを越えて見える可能性」を現実化するための、「子どもたちのコミュニケーション・表現への欲求に応える、豊かな関係づくり」として、「子ども—教師、子ども相互の共感づくりのための仕掛け」「多様な表現方法・機会の保障」「文化活動における子どもの権利保障」といった視点を提起するとともに、「子どもの権利条約」の基本的な理念でもある「子どもと大人のパートナーシップ」の確立、「教育の対象(客体)としての子ども」から、「学習の主体としての子ども」への、教育・学習における子ども観・指導観の転換」の必要性などを強調してきた⁵⁾。このような分析・提起に含まれているのは、生活の社会化・商品化の進展による、人間性の疎外と、そこからの離脱を求める今日の子ども・青年の欲求の増大への着眼である。それは、消費生活の協同、地域課題の解決を目指す住民の学習活動、小地域福祉活動など、様々な地域社会において主体形成のための協同が模索されている状況とも重ねて考えることができる⁶⁾。この認識の根幹には、資本主義社会の労働における人間性疎外の実態と、教育・学習、生活協同といった実践から経験的に導き出された「協同の理念」という、ふたつの要素がある。後者による前者の克服の可能性への期待が込められているといってもよい。そのような発想は、おとな—子ども関係や、能力論などの分野でも議論のテーマとなってきた。例えば、「主体—客体関係でなく、主体—主体関係で、教師と子ども、大人と子どもの関係をとらえる」「多様な能力をそれぞれに備えた諸個人の協同」といった考え方が、提起されている⁷⁾。

高度な分業化の進展、商品経済の生活の隅々

への浸透によって、人と人との関係がモノ(商品)に隠れて見えにくくなるという状況に焦点をあてた教育実践も見られる⁸⁾。今日、そうした状況は、情報化や国際化の進展によって一層強まっている。それだけに、教育論、指導論としても、社会(生活)が、子ども・青年の成長・発達に与える影響について、議論の枠組みを今日の状況にふさわしく発展させること、あるいは精緻な理論化をすすめることが求められている。このような議論の発展・理論化への関心から、筆者は次のようなハーバーマスの指摘に注目した。「西側諸国の高度工業社会においては、階級闘争に社会国家的な限定が加えられることによって、依然として資本主義に制約されてはいるが、階級的特殊性に還元できない新しい力学、コミュニケーション構造をもった行為領域の物象化という力学が進展している」⁹⁾「コミュニケーション構造をもった行為領域」つまり日常生活世界における、人と人との関係の貧困化が、今日の子ども・青年に現れている様々な問題事象の要因なのではないかというのである。

3. 「アイデンティティ危機」を問うキーワード—物象化と「コミュニケーション的行為」

本稿執筆のいまひとつ動機は、豊泉周治の近著にある¹⁰⁾。豊泉は、ハーバーマスの社会理論を「現代における転形期の主題化に努めた」ものとして、その「システムと生活世界」という「二重の社会概念」に着目し、「アイデンティティ危機はこの二元性がシステムの論理によって内的に浸食されるところから始まる」¹¹⁾と考えている¹²⁾。そして、ハーバーマスは、この「浸食」を、「システムによる生活世界の内的植民地化」と呼び、「生活世界におけるコミュニケーション的行為の徹底したたかき」が、この「内的植民地化」からの解放の力となると考えているという¹³⁾。ハーバーマス自身のことば

を借りれば「近代の自己理解に反映されているこの（世界像の合理化の結果として発生していたはずの一筆者注）コミュニケーション的合理性だけが、独立したシステムの固有力学による生活世界の隷属化という事態に抵抗するための内的論理を与えてくれる」というのである¹⁴⁾。

ところで、この「浸食」「内的植民地化」は、「コミュニケーションの構造をとった行為領域が媒体に制御された相互行為にスイッチを切り替えられる、という社会関係の物象化」¹⁵⁾「そして、この『価値』（マルクスの言う交換価値 … 筆者）—それがまるで第二の自然の対象であるかのように一を目指して目的合理的に振る舞うことによって、お互いの間で、いや自分自身に対してすら、対象化する態度をとり、社会関係だけでなく、内面的な関係までも、道具的な関係に変形してしまう。その限りでは、具体的な労働力から抽象的なそれへの転換は、その時々個人の生活や共同社会的な生活が物象化されてくる過程である」¹⁶⁾と説明される。

現代におけるアイデンティティ危機のこのようにとらえかたや現代社会の構造的把握においては、「物象化」概念（論）とコミュニケーション（的行為）の二つが問題の鍵を解く概念となっている。このことは、次に述べるような過程で筆者が現在抱いている問題意識と重なっている。したがって、本稿では、直接にはこの「物象化論」と「コミュニケーション的行為」をめぐる理論的考察を内容とすることになる。ただし、「物象化論」については、マルクスの「物化（Verdinglichung）」、「物件化（Versachlichung）」あるいは、「物神性（Fetisch）」といった概念、ルカーチの「物象化（Verdinglichung）」概念、そしてハーバーマスの上記のような関連する諸概念の間の異同について一定の前提的考察が必要でなはいまでもない。しかしながら、本稿では、主に時間的制約から十分な考察ができなかった。そこで、今回は、今後の研究の手がかり（「研究ノート」）として、とりあえず、山本広太郎氏の著書『差異とマルクス 疎外・物象化・物神性』

（青木書店、1985年）、リュシアン・ゴールドマン『ルカーチとハイデガー』（川俣 晃自訳、法政大学出版会、1976年）などをもとに、若干の議論の整理を行っておくことにした。

あわせて、物象化の概念について、ハーバーマスの「システムと生活世界」の概念を中心に、その骨格をおさえ、関連研究をたよりに、現代の子ども・青年を対象としたあらたな教育・指導論の手がかりを探ろうと考えている。それは、同時に、ハーバーマスのいう後期資本主義に位置する今日の日本社会における生活主体形成の論理を探ることでもあり、福祉社会における主体形成に関する原理的な検討の一助となるものとする。

4. 「物象化論」から見た現代

筆者が、現代の中学高校生の特徴的行動や言動から感じ取ってきた「コミュニケーション・表現志向」の背後に、先の「大阪子ども調査」に現れていた生活の商品化の影響、その結果としての「アイデンティティの危機」があることは、既に述べたところである。現代の子ども・青年をめぐる生じている問題群は、子ども・青年固有の危機（現代社会における人間発達の危機）であると同時に、商品化による人と人との関係（人格的関係）のゆがみという近代社会に働くこの大きな力に、子ども・青年が全面的に包摂され、子ども・青年固有の現象形態として生じているという認識がいま重要である。先の豊泉の提起もこの点に関わっている。

既に見たように、ハーバーマスの「システムによる生活世界の植民地化」の概念は、「生活世界の物象化」を読みかえたものであった。この読みかえの前提には、ハーバーマスのマルクスの価値論に対する批判がある。批判の論点は次の三つである。第一は、『システム』と『生活世界』という二つの分析レベルで動いてはいたが、ヘーゲルの論理学にとらわれたままの彼の政治経済学的な基本概念の中で、この二つを

分離することはなかった」というもの。第二は、「マルクスには伝統的な生活形態の破壊と、伝統から切れた生活世界の物象化とを区別する上での規準が欠けている」というもの。第三は、これが「決定的」とされているが、「生活世界のシステム命令への包摂の一つの特殊ケースを過度に一般化している点にある」というものである。第三の論点をハーバーマスが「決定的」とするのは、「物象化の過程は必然的にそれが引き起こされた領域—労働世界—だけに現れる、というものではない。(中略) …物象化の過程は、私的な世界にも公的な世界にもはっきりと現れてくるのであり、しかもそれは私的領域での消費者の役割と被雇用者の役割から、まず始まる。ところが価値論は一方の回路だけ、すなわち、労働力の貨幣化が生産者から仕事にまで抽象化された労働行為を収奪してゆく道筋しか計算に入れていないのだ」という記述に見られるように、生活世界、私的領域、消費者の役割における物象化を重視するところから発している¹⁷⁾。

(1) 物象化概念をめぐる

はじめに、マルクスによる「物象化論」の基本的内容を押さえておきたい。「物象化」を人格の相互的關係を物の相互的關係に置き換えてしまう「取り違え」と見る見方は、例えば「人と人との社会的關係が、いわば逆さまに、つまり物と物との社会的關係としてあらわされる」¹⁸⁾あるいは、「労働の分割による人間的な力(關係)の物的なそれへの転化」¹⁹⁾といった記述に根拠を求めることが多い²⁰⁾。ここでの「転化」は、Versachlichungであり、「物化」と訳されている。そして、この「物化」の克服は、「人々の共同」によってのみ可能で、「(他人たちとの)共同こそが(各)個人がその素質をあらゆる方向へ伸ばす方便なのである。従って共同においてこそ人間的自由は可能となる」といった克服の方向が示されている²¹⁾。

しかし、山本によれば、このような理解は「物象化」を「物神性」と同一視するもので、

『資本論』第一卷第一章第四節「商品の物神性とその秘密」をみているが、「物象化」として一般に表象されてきている内容は、著作全体で見れば、『資本論』第一卷、第三卷、『剰余価値説史』第一卷、第三卷、『経済学批判要項』、『直接的生産過程の諸決定』等に登場しているものを見るべきであるという²²⁾。さらに「物象化」に該当する言葉は、マルクスにおいて「物化 (Verdinglichung)」と「物件化 (Versachlichung)」の二つがあるとし、その違いについて、ヘーゲル、さらにカントにさかのぼって説明しようとしている。

まず、「物化 (Verdinglichung)」に含まれるDingは、「外的な対象を認識する感覚や知覚の対象であるのに対して」、「物件 (Versachlichung)」に含まれるSacheは、「自己自身を反省する自己意識の対象であり、自己意識にとって外的なものではなく、反対に、それ自体自己意識の所産であるものが対象的になったものである」とする。この区別は、ヘーゲル、カントによるそれであると同時に、マルクスにおいても同様であるという。そして、「商品、貨幣、資本は、マルクスの場合にも、カント、ヘーゲルの場合におけるのと同様の区別がなされている。すなわち、商品、貨幣、資本は感性的認識の対象としてみればいずれも物Dingである。しかし、商品が商品であり、貨幣が貨幣であり、資本が資本であるのは、人間の社会的關係によるのであり、それらの根拠を主体としての人格Personの諸關係のうちにもつのであるから、商品、貨幣、資本は物Dingではなく、物件Sacheなのである」というのである。したがってSacheは社会的なDingではない。知覚は対象をDingとしてしか意識に反映できないので、Sacheは、社会的なDingとその属性として反映されることになり、DingのSache化、すなわち「物化 (Verdinglichung)」が起こるのである。そして、このSache化されたDing、つまり社会的諸關係の「物化 (Verdinglichung)」のために生じる「社会的な物(Ding)」が、呪物 (物神) Fetischであるとされる。例えば、貨幣そのも

の（札やコイン）が価値と見えたり、資本の増殖過程が「金が金を生む」ように見えたりするのは、この「物化」によるのであり、その場合の貨幣、資本が物神Fetischなのである²³⁾。

以上のような関係は、認識レベルの関係であるわけだが、次に人格Personと物件Sacheとの関係についての山本の議論を追ってみよう。まず、人格と物件との関係は、実践的関係であるという。すなわち「『物件Sacheの人格化Personifizierungと人格Personの物件化Versachlichug』とは、商品の交換（流通）過程において、PersonがSacheを支配するのではなく、逆にSacheがPersonを支配するという現実の転倒のことを言っているのである」と述べ、その根拠を『資本論』第三巻「貨幣または商品流通」第二節「流通手段」の2「商品の変態」に求めている。（「物象化論」者—たとえばルカーチ（筆者注）—たちがそれを論じる『資本論』第一巻第一章 第四節の商品の物神性のところにはない）そして、商品、貨幣、資本は単にSacheを媒介とする人間関係に過ぎないのではなく、「Personの関係をSacheに疎外した人間関係」であるという。ルカーチらの「物象化論」では、疎外概念と物象化概念が分離・対立させられてきたが、マルクスにおいては、疎外と物件化の一体性が貫かれているという。こうして、「物象化論者」のいう、「物象化」は、マルクスの物件化Versachlichugとは全く別物というより、正反対の物であるという結論に達する。この結論をもう少し詳しく紹介すれば、次のような内容である。

「かの『物象化論』では、Personは、対他的には社会的諸関係に、対自的には認識的主観にあらかじめ還元されており、人格Personの実践的自由は原理的に否定されている。…マルクス解釈に浸透している、悟性主義的解釈においては、人格は他との関係においては社会的関係に、それ自体としては意識に還元されて、分解されているので、人格の物件化も意識の『物象化』（この場合は内容上、物化Verdinglichung）に還元されてしまうのであった。そ

の結果、このような解釈においては、口では『物象化』だとされながら、実際には、物神性論が、とりわけ商品の物神性論が展開されてきたのである」²⁴⁾ こうした山本の議論は、人格の実践的自由の否定に対する批判と読みとることが出来る。そして、それは、商品化の進む現代における、人格の主体的行為の可能性を探る上で、一定の有効性をもつと思われる。ハーバーマスの「物象化論」は、山本のように、マルクスの主張に忠実に、その正確な理解に依拠しようとするものではないが、現代の社会構造についてのシステム論的分析を視野に入れつつ、独自の概念で迫ろうとしている点で注目される。

（2）ハーバーマスの物象化論

ハーバーマスの「物象化論」は、「生活世界の植民地化」として展開される。彼のいう「生活世界」とは、「人々が日常的にコミュニケーションを交わす基本構造」と説明される²⁵⁾。ハーバーマス自身による一般的定義は、「文化的に伝承され言語的に組織化された解釈範型のストックのことである」²⁶⁾ あるいは「話し手と聞き手がそこで出会う、いわば超越論的な場である」²⁷⁾ というように、「コミュニケーション的行為の地平と背景としての生活世界」と見ることができる。これを、資本主義、近代国家の成立に即してみたとき、「資本主義と近代国家＝アンシュタルトとは、媒体である貨幣と権力を通して、制度システムすなわち生活世界の利益社会的な構成要素から、高度に分化して成立したサブシステムである。これに対して、生活世界は、独特のやり方で反応している。市民社会において、社会的に統合された行為領域（生活世界）は、システム統合された行為領域（経済と国家）に対して、私的領域と、公共性の領域として相互補完的に関連しあっている」²⁸⁾ という両者の関係がとらえられる。

このように、制度システムは、生活世界から分化・成立しており、相互補完的な関係でとらえられている。資本主義と近代国家というサブシステムの成立過程についてのこの理解は、生

活世界との関係についての次のような前提に立っている。

「すなわち、合理化の進んだ生活世界は、例えば経済や国家行政といった、次第に複雑さを増す、形式的に組織された行為領域から分断されると同時に、他方でますますそれに依存するようになってくるという前提である」²⁹⁾

次に、『コミュニケーション的行為の理論』の第8章「最終考察」の要点をおいながら、ハーバーマスの「物象化論」の性格を素描しておきたい。

『コミュニケーション的行為の理論』において、ハーバーマスは「生活世界とシステムのアスペクトを結びあわせる二層的な社会構想」に、タルコット・パーソンズの社会理論の構成問題を手がかりに到達した³⁰⁾。ハーバーマスは、パーソンズをヴェーバーの「中間考察」を中心とした研究がもっている「同時代診断的な潜在力を十分に汲み上げることができていない」と批判しつつ、次のような仮説にたって、「近代的社会化のアポリアに対する新しい展望が開けてくるはずである」と述べている。この仮説に基づく展開が、『コミュニケーション的行為の理論』の結論部分である。

ハーバーマスの仮説は次の3点からなる。「(1)わたしが『生活世界の隷属化』という言葉に要約して取り扱った問題である。(2)西欧型マルクス主義の精神から、ここでもう一度ヴェーバー受容の問題を取り上げるとしても、既にそれが(デュルケームとミードを手がかりに展開されてきた)コミュニケーション的理性の概念に触発されたものである以上、マルクス主義の伝統そのものに対して全く無批判というわけにはいかない。西側諸国の高度工業社会においては、階級闘争に社会国家的な限定が加えられることによって、依然として資本主義的に制約されてはいるが、階級的特殊性に還元できない新しい力学、コミュニケーション構造をもった行為領域の物象化という力学が進行しているからである。(3)マルクス主義の基本的な見解をあくまで批判的に受け継ぎ展開してゆくことに

よって、今日際だっている社会的近代化のアポリアに対する新しい展望が開けてくるはずである」³¹⁾

ハーバーマスはまた、資本主義による近代化が生む汚点(「伝統的な生活様式をそのコミュニケーション的な実体もろとも全面解体する」)について次のように述べている。

「文化的貧困の真の原因は、専門家文化がコミュニケーション的な日常行為の連関からエリート的に引き裂かれているところにある」「媒体に制御されたサブシステムとその組織形態が生活世界から分断されるから、コミュニケーション的な日常実践の一面的合理化や物象化が起こるのではない。文化的伝統、社会的統合や教育の機能をこれまで専ら果たし、行為調整のメカニズムとして専ら了解に依存してきたが故に、貨幣や権力の媒体に切り替えられることに強く抵抗する行為領域の中へ、経済的・行政的合理性の様々な形態が進入してきて初めて、物象化現象は生ずるのだ」³²⁾

冒頭で述べた、ハーバーマスの「物象化論」が、「生活世界の植民地化」論であるというのは、この「進入」の意味である。

このように見てくると、ハーバーマスの「物象化論」は、マルクスの「商品の物神性」に依拠した「物化」「物件化」概念とはかなり異なる構成をもったものであることがわかる。その相違は、ハーバーマスのルカーチ評価、すなわち「階級意識の理論と結びついた物象化の理論」(階級意識と結びついた物象化のとらえ方では、資本主義の進んだ段階における物象化をとらえることができないという趣旨の次のような主張:「政治的な体制として階層化された社会においては、階級の力学は、社会集団相互の利害対立のレベルでストレートに現れるが、市民社会になると、それは、交換価値の媒体に基づいて客観主義的に隠蔽されると同時に客体化され、つまりは物象化される」)や、マルクスの価値論批判の第三の論点(「物象化の過程は必然的にそれが引き起こされた領域—労働世界—だけに現れる、というものではない。(中略)

…物象化の過程は、私的な世界にも公的な世界にもはっきりと現れてくるのであり、しかもそれは私的領域での消費者の役割と被雇用者の役割から、まず始まる。ところが価値論は一方の回路だけ、すなわち、労働力の貨幣化が生産者から仕事にまで抽象化された労働行為を収奪してゆく道筋しか計算に入れていないのだ」に基づく、「労働力は行為としては生産者の生活世界に属し、人間労働としては資本主義的経営と経済システム全体の機能連関に属することになる」³³⁾という主張にみる事ができる。

ハーバーマスの「物象化論」＝「生活世界のシステムによる植民地化」論は、「物象化論の通俗的理解」（主としてルカーチ）としての批判には当たらず、「二層化論」と、「コミュニケーション的構造をもった行為」の概念の妥当性を問題にすべきである。そして、「コミュニケーション的行為の徹底したたかき」こそが「独立したサブシステムの命令」が生活世界の内部に侵入しようとする圧力に抗する有効な力でありうるという点が、ハーバーマスの最も核心的な主張である以上、コミュニケーション論の側面から、あるいは、(マルクスの核心である)労働概念のより掘り下げた検討によって、ハーバーマスの「物象化論＝生活世界の植民地化論」の、今日的可能性を探ることができるのではないだろうか³⁴⁾。

本稿の最後に、この作業を尾関周二の論考に依拠してすすめてみたい。

(3) 物象化とコミュニケーション論—尾関周二のコミュニケーション論に学ぶ³⁵⁾

尾関は、ハーバーマスの「意識論から、言語論への転換」「労働モデルからコミュニケーションモデルへの転換」の主張を、「マルクス主義への一種の『対抗思想』という性格をともなつつ、デカルト的な実体化された自我とそれに由来する二元論の克服動向の中で、言語論やコミュニケーション論への関心、またその関心を前提としたシンボリック観点からの身体論（例えば現象学）や無意識論（例えばフロイト）と

して展開されていった」非マルクス主義の潮流のなかに、ポスト構造主義に位置するリオタールと共に位置付け、彼を「フランクフルト学派から出発して、現代哲学のある意味での総括者」ともいえると評価している³⁶⁾。

そして、ハーバーマスとリオタールの対立を「ハーバーマスは、『イデオロギーとしての技術と科学』以来、旧マルクス主義の労働一元論からの脱出を試みたが、それを批判するあまり、労働主体の問題意識を希薄化させ、労働との排他的な関係にあるコミュニケーションの主体へ関心が集中し、結果的に労働とコミュニケーションの対置にとどまっている、といえる。そして、このようなハーバーマスにおけるコミュニケーションと労働の二元論的対置という弱点に対して、リオタールによるコミュニケーション一元化によるハーバーマス批判があるといえよう」ととらえている³⁷⁾。

したがって、尾関の基本的立場は、「コミュニケーションと労働の区別を押さえた上での内的連関・相互浸透の方向」³⁸⁾となる。

この方向は、「コミュニケーション主体とともに、労働主体をしかるべく位置づける」³⁹⁾もので、「労働もまた、人類の始原を振り返れば理解されるように、単に生存の維持に関わるだけでなく、自然に根ざした根元的な価値的世界を言語コミュニケーションとともに開くものなのであり、対象的存在の実質に触れるものであるが、この点をハーバーマスは見落としているように思われる」⁴⁰⁾という主張につながる。また、「ハーバーマスの労働の基本イメージは、近代以降の工業的労働のイメージが中心」になっており、「地域の生態系に根ざした本来的な（工業化されたものでない）農業労働が問題とされる場合、…生態学的合理性もまた問題となる」⁴¹⁾とも述べている。

こうした尾関の主張は、言語的コミュニケーションと労働の内的連関に関する詳細な研究によって裏付けられており、「人間労働を、人間労働たらしめる目的表象と身体の制御や労働の規律的協同性は、内言と社会的コミュニケーション

ョンなしにありえない」⁴²⁾ という、十分説得的なものである。

尾関はさらに、「生活世界は、コミュニケーション的に再生産されるだけでなく、労働的に再生産されるというふうに理解されるべきである。このようにみると、われわれは、『生活世界』概念においてもコミュニケーションと労働の内的連関・相互浸透の場に立ち会っており、本源的にコミュニケーション主体に関係づけられた労働主体もまた生活世界に位置づけられるべきであろう」⁴³⁾ と述べている。

ところで、ハーバーマスの「二元論的構成」において、「労働力は行為としては生産者の生活世界に属し、人間労働としては資本主義的经营と経済システム全体の機能連関に属することになる」⁴⁴⁾ と述べられていた。そのかぎりでは、労働主体が生活世界に位置づけられていないとは言えないであろう。ただ、労働力のこのような性格を「商品としての労働力の二重性」ととらえ、システム世界に位置づけられた労働が「抽象化」し、この抽象化が生活世界にまで及ぶ過程を「生活世界の物象化」ととらえている点は吟味が必要である。

労働を対象的活動としてその本質においてとらえる局面においては、尾関の主張のような、コミュニケーション行為と労働との統一的な概念化も可能であろう。しかし、資本主義社会における賃労働、つまり上記の「抽象化された労働」については、そもそも問題設定の次元が異なっている。いわば、ハーバーマスが行っている資本主義と近代国家というサブシステムが作動している現代社会という理論的限定において、議論をたてることが重要である。そこで、「抽象化された労働」に従事している、発達した資本主義国における現代市民が、私的領域としての生活世界におけるコミュニケーション行為においても「生活世界の内的植民地化」の克服に向けた可能性は、いかなるものなのか、それが本稿全体の問題意識でもあり、ハーバーマスがいう「未完の近代」を越える論理の探求とも重なるのではないだろうか。哲学・社会学

には門外漢の筆者が初めて踏み込んだハーバーマスの批判社会理論を梃子に、現代（日本）社会における、コミュニケーション（的行為）の可能性を探るという、あまりに無謀な企てのため、その意図すら素描できていないのではないかという危惧をいだきつつ、最後に筆者の本来の研究領域である教育分野に議論を引き戻して、再度本稿の意図につないでおきたい。

5. 生活主体形成の論理

(1) 消費社会における協同の問題

生活協同組合の活動に見られるような消費における協同、子育て分野における協同（保育所づくり、地域における子ども文化運動など）、福祉の助け合い、地域の環境を守るための住民運動などは、産業社会あるいは消費社会における市民の生活世界における人格的關係づくりとしての性格をもっている。これらは、ハーバーマスのいうコミュニケーション的行為としての質を含み、経済や公権力に対する「したたかな」対抗力を発揮しうるものなのだろうか。

また、規制緩和と競争による産業流動化政策のただ中におかれた労働に、働く者の権利に根ざした民主的規制を実現する道筋に、上記の生活世界におけるコミュニケーション的行為の対抗力は、いかに接続されるのだろうか。少し飛躍するが、こうした問いとその答えとの間に介在する一つの契機として、学習活動をおくことはできないだろうか。「主体形成の社会教育学」という提起に含まれている諸要素がその可能性を示している。

(2) 生涯学習（社会教育）における（生活）主体形成論（生活課題・地域課題の学習）

鈴木敏正は、『「主体形成の社会教育学」の構想』について述べる中で、「社会教育とは、地域住民が協同活動を媒介にした公共性の形成をととして、現実的に社会的個人となっていく『過程の主体』となることである」と定義して

いる⁴⁵⁾。そして、「社会教育実践は、最も一般的には、以上のような諸活動（労働組合運動や文化運動など一筆者）が展開されている地域の中で、自己実現と相互承認の関係を社会的に創造し蓄積していくことである」と述べている。さらに、この展開過程は、「現実人間社会を創り再生産する活動」であり、「そのルートは、生活活動からも文化活動、社会的運動からも開かれており、きわめて多様である。それは一般的には相対的に自由をもった活動から入り、それらの疎外された形態を止揚しつつ、『労働』の変革に至るのである」⁴⁶⁾と説明されている。

これを、生活世界におけるコミュニケーション的行為から、「抽象的労働」の止揚に至る過程と見るのは、あまりにうがった見方であろうか。さらに、その延長線上に、今日コミュニケーション的行為に固有の思い入れを注ぐ子ども・青年の姿を筆者は見ているのであるが。

<注>

- 1) 中央教育審議会答申「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について（第一次答申）」1996年7月19日
中央教育審議会（答申）（「新しい時代を拓く心を育てるために」一次世代を育てる心を失う危機—1998年6月30日
- 2) 大阪「子ども調査」研究会編、『21世紀を担う子どもたち』、法政出版、1993年。
- 3) 同上書 43～45、120～131ページ。
- 4) 「人間的コミュニケーションと表現を軸に、現代の子どもの可能性をひらく」、『生活指導』、1996年5月号、102～109ページ。
- 5) 「子どもとおとなの『いま』を考える」、『エデュカス』、1998年1月号、67～74ページ。
- 6) 「現代の子ども・青年の変化と教育運動のスタイルを考える」『生活指導』、1998年6月号、94～101ページ。
- 7) 池谷壽夫他著、『競争の教育から協同の教育へ』、青木書店、1988年など。
- 8) 例えば、鈴木正氣著、『支えあう子どもたち』、新日本新書、1986年など参照。
- 9) J.ハーバーマス著、丸山他訳、『コミュニケーション的行為の理論』下、未来社、1987年、285～286ページ。
- 10) 豊泉周治、『アイデンティティの社会理論 転形期日本の若者たち』青木書店、1998年。
- 11) 同上書、33ページ。
- 12) 例えば、「物質的再生産における危機的な不均衡」を回避するための、「生活世界の記号的再生産の障害（「主観的に」経験された同一性を脅かす危機あるいは病理現象）」という代償」として説明されている。ハーバーマス『コミュニケーション的行為の理論』下、289～290ページ。
- 13) 豊泉周治、前掲書、31～34ページ。
- 14) J.ハーバーマス、前掲書、329ページ。
- 15) 同上書、428ページ。
- 16) 同上書、332ページ。
- 17) 同上書、336～342ページ。
- 18) マルクス『経済学批判』、第1章、大月書店、全集版、第13巻、19～20ページ。
- 19) マルクス『ドイツイデオロギー』、大月書店、全集版、第3巻、70ページ。
- 20) この場合の「物象化」にあたる原語は、Versachlichungであり、「物化」と訳されている。大月書店全集版、第26巻、『資本論』、496ページなど参照。
- 21) マルクス『ドイツイデオロギー』、大月書店、全集版、第3巻、71ページ。
- 22) 山本広太郎、『差異とマルクス、疎外・物象化・物神性』青木書店、1985年、105～106ページ。
- 23) 同上書、108～111ページ。
- 24) 同上書、123ページ。
- 25) 中岡成文、『ハーバーマス コミュニケーション行為』講談社、1996年、172ページ。
- 26) 同上書、25ページ。
- 27) J.ハーバーマス、前掲書、27ページ。
- 28) 同上書、308～309ページ。
- 29) 同上書、289ページ。
- 30) 同上書、284ページ。
- 31) 同上書、285～286ページ。
- 32) 同上書、324ページ。
- 33) 同上書、331ページ。

- 34) 同上書、429ページ。
- 35) 尾関周治、「思想としてのコミュニケーションと人間観の深化」(『思想としてのコミュニケーション』、大月書店、1995年。)
- 36) 同上書、30～31ページ。
- 37) 同上書、37ページ。
- 38) 同上書、38ページ。
- 39) 同上書、38ページ。
- 40) 同上書、43ページ。
- 41) 同上書、38～39ページ。
- 42) 同上書、44～45ページ。
- 43) 同上書、40ページ。
- 44) J.ハーバーマス、前掲書、331ページ。
- 45) 鈴木敏正、『学校型教育を超えて』、北樹出版、1997年、192ページ。
- 46) 同上書、198～199ページ。